

「クレーンと鉄道マニア」

ほっとはうす 永本賢二

加藤タケ子

加藤：(スライド 10) 冒頭の写真は松永さんと同じ三輪車の写真となっております。この三輪車、同じ意味があるのですよね。

永本：僕もそうですね、歩けませんでした。小さい頃、三輪車は本当に移動の手段でした。

加藤：家の中の三輪車ということですね。

永本：三輪車はよく乗っていましたが、とても体がきついです。だから、障子につかまって三輪車に乗っていました。でも、僕のお父さんは原因のチッソに勤めていまして、さあ、どちらの味方にはいいのかなと思っていました。僕は、お父さんが僕にさせた赤いハチマキは、照れくささもあって少し嫌だった記憶があります。お父さんはかっこいいなあと思っていましたが、あの第一組合の人達の、あの「がんばろう！」の声はよく覚えていて懐かしいです。第一組合の後にできた第二組合は、会社（チッソ）の御用組合と言われていたので、チャンバラごっこで「御用だ！御用だ！」と言いすぎると周りにいた第一組合のおじさんに嫌な顔をされました。

僕が本当に一番辛いのは仲間たちが車いすになり、今歩けるのが僕だけだということです。でも、僕もいつまで歩けるのかなあと思います。そうすると一人の人が、いつまで車いすの押し方を教えてくれるかなあと言います。だからいつまでも車いすにはならないぞ、という目標を立てながら、一生懸命がんばっております。

小さい頃とっても嫌だったのは、「補償金で何でも買えていいねえ」と言われることでした。頭にきました。第二小学校という所はチッソが目の前で、工場のいろんな音が聞こえてきました。

それにしても、「けんちゃんはいいいねえ。補償金もらえていいねえ」と言われるのが大嫌いでした。小学校 1 年生の時にいつも言われた言葉があります。鉛筆を買ったときに、「よかね、けんちゃん。あんたはお金（補償金）があるけんね」それがとっても嫌でした。で、「これはチッソのお金で買うんじゃないよ。お父さんのお金で買うんだよー」と、本当は言いたかったです。

加藤：お父さんがチッソ工場の労働者、永本さんは昭和 34 年生まれです。それから、永本さんが生まれて 3 年後の昭和 37 年に胎盤は毒物を通過させてしまったという事実が原田正

純先生の所属される熊大立津研究室の研究により世界で初めて明らかになり、水俣病の胎児性が確認されました。

当時原因は不明と言われていた水俣に生まれた赤ちゃんたちに、ようやく水俣病という病名がつけました。その前後に多分、永本さんのお父さんはご自分がチッソ工場に勤めておられる身でありながら、3歳になっても歩けない、常に体の痛みを訴える赤ん坊の自分の子どもが、これはやはり水俣病に間違いないということで、自分が勤めている会社に、弓引く思いで会社と直接交渉をしたと聞いています。チッソ工場で働く身でありながら自分の息子を水俣病と認定させ、そして、金をもらっている。そのことでお父さんが会社の中で差別を受けたことは言うまでもないことですが、さらに、永本さんが本当に小学生の身でちょっとした買い物をするとき、「けんちゃんの家はお金があっていいね」ということをやはり言われ続けていたのですね。この事実は、『水俣病から宝物を伝えるプログラム』の語りの最中に幼い日の嫌だった記憶がよみがえり、語ってくれたのですね。

(スライド 11) そして、これは梅戸港の写真ですね。永本さんは小さい時からクレーンを見るのが大好きでした。

永本：そうですね。もう家の前から見えるこのクレーンが、僕を慰めてくれました。

加藤：(スライド 12) 梅戸港にクレーンがいっぱいあるんですね。これを家の窓から眺めたり、いじめられて帰るときに、墓道を通って帰ればいじめっ子がいないというわけですね。

永本：はい。(スライド 13) そしてこれが新 5 トンクレーンといって、これが一番新しいクレーンです。チッソは、またここで出ているのですよね。水俣第二小学校の校歌の中にもチッソの歌があります。「♪～明け暮れわたるベルトの響き～」など。僕は目の前がチッソですからね。その風景を見ないと落ち着きませんでした。特に母校第二小学校の校歌はチッソのことが歌われていますが、懐しく大好きです。集団登校で足の遅い僕は皆に引きずられるように登校したこともあり嫌だったし、バスで登校した時はバスのステップを早く降りられなく、傘でさされるようなしぐさをされたことも嫌だった。学校の先生からは特殊学級ということで、授業時間に校舎の縁の下猫のうんちを拾ってと言われ仕方なくやりました。その時、とても嫌でした。特殊学級の子もだから先生は頼んだような気がしました。早く石鹸で手を洗いたかったなあという気が今でもします。

加藤：40 年代の地域の学校というのは、障がいを持つ子どもに対するあからさまないじめが日常的だったようです。そういうことで永本さん、「特殊学級」ってとっても嫌な意味ですよ。ね。「特殊学級」という言葉を投げつけられた心境でした。先生も、「もう勉強しなくていいから、そのうんち早く片付けなさい」と、そんなことですよ。ね。そういう永本さん、このクレーンがチッソのクレーンであったとしても、お父さんがチッソの労働者であ

ることを、誇りをもって、生きている姿を見てきました。だから、チッソの風景は幼いころから馴染んだ懐かしく、心落ち着く風景だったんですね。

永本：お父さんががんばっている姿を見て、お父さんありがとうという感謝の気持ちしかないです。

加藤：(スライド 14) チッソで働くことを誇りにしていた。でも「チッソからお金をもらっていいね」という言葉を投げつけられたとき、辛い気持ちを癒やしてくれたのはチッソのクレーンだった。

(スライド 15) そして、最後にお父さんのお写真です。最後のお写真ですかね。

永本：これは、小学校 4 年生の時です。お父さんは小学校 5 年生で亡くなりました。本当にお父さんとは、別れたくないと思いました。お棺の釘を打っているとき、クレーンが、「最後にちゃんとお別れしないとだめだよ」と、言ってくれたようで、最後はちゃんとお別れができました。

加藤：永本さんのお父さんが働いていたチッソは、三交代です。だから、チッソの工場で労働者でありながら漁民でもあったということで、永本さんのお父さんは船も持っていました。永本さんのお名前をつけた「賢二丸」という船だったそうで、その船を新造して、数か月後お父さんは、今思えば焼酎を飲み過ぎて死んだといわれましたが、あれは水俣病だったのかもしれないなあという、そんな思いもおありですね。

永本さん、辛い話も含め、本当によく話してくださいました。ありがとうございました。